植民地時代のハイチ

1492年　コロンブスによる「発見」

　　　　スペインによる支配

　金鉱山が発見され、カリブ人が奴隷として働く

　西アフリカの黒人奴隷も働く

1959年　フランスが徐々に占領

1697年　フランス領サンドマング

　黒人奴隷にサトウキビ・コーヒーを作らせる

独立以前のハイチ

- 混血が進み、階層分化
  - 本国生まれの白人、クリオーリョ、メスティーソ、インディオ、ムラート、黒人など
- 独立の背景
  - 本国の圧政に対する不満
  - アメリカ独立革命・フランス革命の影響
  - ナポレオン戦争中の大陸封鎖で本国からの支配が弱まった

トゥサンルヴェルチュールの生涯

- 1743年　奴隷の家庭に誕生
- 農園の管理者　ベヨン･ド･リベルタのおかげで読み書きができ、奴隷としては比較的裕福だった
- 1789年　人権宣言

　　→プランテーション経営者の反対

　　→有色人種の権利を求める反乱が起きる

- トゥサンはこの反乱には加わらなかった

　→当初、反乱による破壊、流血に否定的だった

ハイチ革命①

- 反乱指導者の不適切さと、白人自由主義派との妥協を非難
  →反乱指導者たちを権威的に指導し、ゲリラ戦の中で訓練
- 熱病にやられたヨーロッパ軍に勝利を重ね、トゥサンはナイトに叙され、将軍としても認められるように
- 1794年　ジャコバン派の国民公会がフランス全領土での奴隷廃止を決定
  →トゥサン、共和主義者になり、フランスに寝返る
  (イギリス、スペインが奴隷廃止を認めなかったため)

ハイチ革命②

- 1795年　フランス革命政府の法を無視して、プランテーション経営者が戻ることを認め、元奴隷たちを軍令で働くように命じた

  (ただし、労働者は鞭打たれることなく法的には自由平等)

- 1797～99年フランス革命政府の弁務官や上官が就任するも、トゥサンの策略により追放

- サン＝ドマング全土を掌握し、その後、奴隷制を維持していたサントドミンゴに侵攻し、奴隷を開放(ナポレオンの命令を無視)

- トゥサンは独裁権力に近い形で自身を終身総督に任じる憲法を制定

トゥサンの最期

- ナポレオンはトゥサンの地位を認める一方、トゥサンを収益の上がる植民地としてのサン＝ドマングの回復の障害だとみなす

- 奴隷制の再建を否定しつつもサン=ドマングの再支配を試みる

- トゥサンはフランスの奴隷廃止を条件に、引退する協定を結ぶ

- しかし、3週間後、反乱を企てているとの嫌疑をかけられ、フランスへ送られ、1803年獄中で肺炎で死去(59歳？)

ハイチの独立を考えるうえで

- トゥサンルベルチュールとは

　◎「独立の先駆者」→正しい。称えられるべき

　×「ハイチの英雄」→時代錯誤で間違い

【なぜか】

　生前隔離されていた彼は、逮捕後に起きた島を独立のための厳しい闘争に突入させた事件を知らなかった。

　そればかりか、彼が死んだ時にはまだフランス領だった島の

　独立を求めたこともなかったから

善悪二元論　―トゥサンの評価―

- 革命の正しい英雄のイメージ

①このイメージが輝くために隠蔽された事実

②第三世界との連帯思想

③脱植民地化の文脈

①について

☆少なくとも1人奴隷を所有していた

☆借りていたコーヒー園では何人もの奴隷を使っていた

- 革命を勝利へ導くことができた

が、結果としては

疲弊し全てを再建しなければならない国の独裁者になった

☆軍隊式の農業中心主義･･･貧しい人々の生活を改善できず
☆「白人入植者にかわって黒人入植者が土地を所有するようになっただけ」
☆トゥサンの後を継いだ支配者たち･･･民衆に悪癖をさらしてしまう

まとめ

- トゥサンを単にハイチ独立の英雄とみなすのは間違い

  功績もあるが、それだけではない

- 彼の実態(マイナス部分が多い)と人々のイメージ(プラス部分が多い)とのギャップ

参考文献

ジャン＝ルイ･ドナディヴー　(大嶋厚) 『黒いナポレオン　ハイチ独立の英雄　トゥサン・ルヴェルチュールの生涯』 (えにし書房、2015年)

ハイチの概要

- 公用語
  - ハイチ語、フランス語
- 首都
  - ポルトープランス
- 最大の都市
  - ポルトープランス
- 面積
  - 27,750㎢(143位)
- 人口
  - 10,033,000人(91位)
- 宗教
  - キリスト教95%(80%はカトリック)